

「全鍍連」 2022年 10月号 若者から一言

福井県表面処理工業組合

青年部会長 若山 健太郎 (株)ワカヤマ 代表取締役社長)

「若者から一言」



福井といえば「幸福度」日本一の県として有名だが、私が注目するのは同じ日本一でも「有効求人倍率」のほうだ。本原稿を執筆している今現在まで、50か月にわたり連続日本一。要するに、福井県は4年連続で、「人手不足日本一」の座に輝いているのだ。

私が代表の座を引き継いだのは34歳のころ。きっかけは初代である父が60歳を迎えたことだった。周りから「引退するにはまだ早い」という声も聞かれたが、初代は「頼りない世代との伴走期間を長くとるためだ」と言い、退任後は、あまり経営に口出ししなくなっていた。

ところがその1年後、事件が勃発。あわや私は、社長をクビになる寸前だった。

この発端は社屋のリフォームをしたこと。検品室と食堂の2部屋に、それぞれ100万円ほどのコストがかかった。おしゃれなカフェ風に生まれ変わった食堂を社員は喜んでくれたが、会長は違った。「検品室はいい。しかし、社員が毎日1時間しか使わない食堂にお金をかけるなんて信じられん。お金の使い方が荒い」と大変なお叱りを受けたのだ。

食堂の改装がそこで働く人にとってどんな大きな意味を持つのか、私の考えをしっかりと説明していればクビになりかけるほどの大げんかにはならなかったのかもしれないが、正直、説明していたとしても同意を得られたかは分からない。

あれから3年。ありがたいことに毎年3～4名の新卒採用ができ、お客様からも「社員が若くて、はきはきしている」とお褒めの言葉をいただける機会が多くなった。県外からの新卒社員に「なぜ、当社に入ろうと思ったのか」と聞いてみると、「第一希望の職種に就けなかったのと……雰囲気がい会社だなと感じたからです。」と真っ正直に答えてくれた。

コロナをきっかけとする混乱も徐々に落ち着き、ここから全国的に人材不足の状況になるといわれている現在では、就職希望者に対し、会社の「姿勢」を分かりやすく伝える必要があると感じる。姿勢の表れの一つとして、今、中小企業に必要なのは、一見すると生産とは何ら関係のない休憩スペースやユニフォームに手を加えるなど、社員のモチベーションアップにつながる「投資」ではないか。



もしも今、会社がうまく回っていないと感じているのであれば、「何かを変えないこと」の方がよほどリスクではなからうか。